

山村の社会基盤、棚田を助けて!

沢畑 亨 *Written by Toru Sawahata*

私は熊本県水俣市の山村部久木野地区で愛林館(市有のむらおこし施設)を運営している。久木野地区は1956年に水俣市と合併した旧久木野村で、当時の人口は水俣市5万2千人、久木野村3千300人。現在は1千人が暮らす山の村である。

旧久木野村の中心部には、かつて国鉄山野線の久木野駅があったが、1988年に廃線となった後、駅跡を活用しようという自主研究グループなどがあつたことから、地元の熱意に応えて水俣市が駅跡地を利用して建設したのが愛林館である。役所の都合で降ってくる施設もあるが、愛林館は地元要望の施設であつた。

1994年に施設が完成し、館長は全国公募された。私は水俣市ではないが熊本県出身で、当時は東京でコンサルタント的な自営業をしていた。東京の暮らしは情報も多く、師匠(今井俊博氏)の幅広い人脈にも触れて勉強になったが、自分の考えを实践する場所はなかつた。

そこで館長に応募し、25人の中から選ばれ、現在に至っている。愛林館は所有者の市が久木野地区の住民団体(各種役員を集めた任意団体「水俣市久木野地域振興会」)に委託費を払って管理をまかせている。私はその会の事務局長であり、愛林館長である。つまり、公務員ではない。

さて、久木野地区は面積約4千300ha。そのうち97%が森林で、谷間に100haの棚田が広がる典型的な山村である。海で起こった水俣病のために、水俣市に海があることは誰でも知っているが、山があり棚田が美しいこと、環境

について先進的な政策を行っていることについては、最近ようやく知られてきたところだ。棚田は、県内に11カ所ある「日本の棚田百選」の棚田の中で最も規模が大きく、私は日本一と認定した。正確には日本で一番私の家に近い棚田という意味である。

眺める分には美しい棚田も、実際に耕作するとなると手間がかかる。1枚の田が狭いため、大型の機械は使えない。今でも耕耘機(エンジンで自走はするが、人間が後を歩いて操縦する)が活躍し、田植え機もコンバインも乗用機械は使えないところが多い。平地の水田は1枚で1ha(1万㎡)近いものもあるが、こちらでは1a(100㎡)前後のものも多い。

最近の10年で、棚田は「眺めるには美しいがやるのは大変」という認識はすっかり固まった。それ以前の「郷愁を誘う場所」よりは、ずいぶん認識は深まったが、私はもう少し訴えたいところがある。

それは、棚田は山村に人が暮らす社会基盤の一つであるということだ。日本の国土の3分の2は山＝森である。九州では森の70%が人工林(人が植えた森)であり、人の手入れが必要だ。手入れをきちんとした人工林は、天然林と同様に環境を良くする働きがある。従来は林業を行うことで人工林の手入れはなされてきたが、今後も現在の材価が続くならば、今後は手入れされないかもしれない。

山村に人が暮らしていれば、儲からなくても手入れをする人がまだ存在するし、人を雇うにしても、遠くから雇うよりは安上がりである。



市場経済下では間伐は進まない(撮影:森永裕香)

このうちの80%が人工林であり、人手を必要としている。林業にまかせていても、手入れは不足するだろう。儲けようと思って木を植えたのだからどうして? そういつ狙いも確かにあつたが、40年前の話だ。数年後ならともかく、40年後の市場動向を見通せないのは仕方ないだろう。米国の貧乏人の借金を組み込んだ証券に金を注ぎ込んだり、バブルで過剰な投資をしたりする人間とは違う。

森を手入れしても、柵田でお米を育てても、今は全く儲からないから、所有者の気持ちだけが頼りだ。柵田で農業専業は無理なので、サラリーマンが勤めのかたわら田を耕す。忙しい時間を縫っての農作業なので、機械の共有は無理。全員が耕耘機がトラクター・田植え機・コンバインを揃えて、代金は軽く300万円は越える。その金で米を買う方がはるかに安上がりだ。兼業農家というよりは柵田サラリーマンである。

では、柵田サラリーマンはなぜ割に合わない稲作を続けるのか? 私が思うに、先祖からの預かり物から自分の代で荒らすわけにいかないという倫理感が6割、荒らしたら周囲の迷惑になるし陰口も叩かれるという共同体規制が2割、米がおいしいし米を進呈することが



柵田のあかり

嬉しいという楽しみが2割というところである。

森の場合は、人目につかない場所も多く、収穫も数十年に一度しかないために、6割の倫理感だけが頼りだから、もっと危機である。

愛林館では、こういう現状の中で、柵田や森林への関心を深め、応援する人を増やすことを考えて活動している。柵田については、田植え直前の時期に、竹とわらとバイオディーゼルのたいまつを2千本とともす柵田のあかり、会費5千円をいただいで40㎡から穫れた大豆を配当する大豆耕作団、耕作を断念して草むらになった柵田の草を刈る田助手(たすけて)、柵田の石垣を作り上げる石垣積み教室、愛林館で直接に柵田を借りて香り米の販売といった活動を行っ



石垣を安定させる3点に置く

ている。大豆耕作団では、毎年50〜60人の会員が応援してくれる。いつも収穫量が少なくて申し訳ない思いが募り、「もうやめようと思う」と言つたところ、「やめるな!」と応援をいただいで大変嬉しかった。耕作者にとつて、遠くから応援してくれる人がいるという事実は大変に心強いものだ。田助手に至っては、なかなか手をつけられなかった柵田1haの草を刈り、一部は復田し、一部は彼岸花畑にするということをやその人の労力で実現することができた。

森については、針葉樹の伐り跡に広葉樹を植え、自然林に近い森(人が植えたから人工林である)を育てる水源の森づくりを行い、ボランティアと一緒に21haの森を育成中である。木が小さいうちは、働くアウトドアという合宿で

周辺の草を刈った。現在は木が大きくなって切る切りを行い、森は順調に生育している。ポラントニアの造林としては、日本最大級と自負している。

森の利用法の一つとして、友人のプロ炭焼き師である溝口秀士氏が開発した簡単な炭焼き法の普及を行っている。溝口氏とは環太平洋洋行300年計画を進めているところだ。焼いた炭は燃やさずに土壌改良材として柵田へまき、二酸化炭素を固定している。

他に、久木野地区全体が屋根のない博物館であるという考えで、水俣市が認定する村丸ごと生活博物館になっており、見学者を受け入れている。森や柵田を見たり、食べ物作りを体験したりすることができる。

また、森と柵田は一体であることを意識して、食育のプロを育てる柵田食育士養成・食育実践講座を昨年度から開催している。都市の室内で行われる食育の勉強と一線を画し、農地へ出かけ、勉強をして、食事を作る教室だ。これは地域づくりとして食育に取り組んでいる霧島食育研究会との共催事業である。

このように、森や柵田に関心を向ける活動の結果、柵田ではお米と同時に良い環境を作っていることを理解し、少し高くてもお米を買ってくれる人は増えてきた。森の環境については、県税水と緑の森づくり税が4年前から始ま

った。導入時にさほどの反対がなかったのは、愛林館の活動や訴えも少しは寄与したものと考えている。

人間の命をつなくために、最も必要なものは酸素と水と食糧。森は酸素を作り、降った雨を貯め、土を作る。森が貯めた水と土を利用して、柵田は食糧を生産する。柵田で暮らす人は森の手入れをし、育てる。柵田は森と人とを結ぶ扇の要である。山の冷たい水を温めるために、遠回りをして田に引き入れたり、竹樋を使って水を立体交差させたり、ハイテクを使わない細か



働くアウトドア・下草狩り(撮影:高平雅由)

い工夫は、環境に負荷をかけない。田の水は水路を經由して別の田に入り、水田の環境負荷(泥水や肥料や除草剤)も川へ入りにくい。

サワガニやイモリなど清流の指標生物も数多く住み、気付く人は少ないけれど、ハイケボタルが結構飛んでいる。

こうした柵田をめぐる知恵や環境を保全するのは、簡単ではないのだが、もっと柵田のお米を買う人を増やすことで、柵田の保全に近づきたい。また、森と柵田の公益的機能に対してお金を払う環境支払い制度も、ぜひ充実させたいところだ。お金で環境を評価するようにしないと、お金のある業種に土地が集まり、産廃処分場などの環境上不安な施設ができてしまう。読者諸氏は、もっと日本のお米(できれば私から買ってほしいものだ)を食べて、家を建てるなら日本の木材を使い、お米や木の背景にある柵田や森を救ってくれまいか。風評被害をまきちらす迷惑な消費者ではなく、森や柵田を支える賢明な消費者が増えることを祈っている。

□ 沢畑 亨(さわはた・とある)

水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館館長。1961年熊本県生まれ。87年東京大学農学系大学院林学専攻修士課程修了。同年西武百貨店池袋店食品企画課勤務の後、89年熱帯文化研究開発機構を創設。94年全国公募の現職に選ばれ、現在に至る。主な著書は、『定年農業のすすめ』(共著、中経出版)、『森と柵田で考えた水俣発 山里のエコロジー』(不知火書房)など。